眞盛四方菊

五

山本八左衛門

特別
ロ9
3908
5

門 9
號 3908
卷 5

昭和二八年三月十日 購求

喜盛四方菊 巻之五

帝國圖書館藏

○ 手文の有るひらゝぬを赤の円徒で見をかゝる円徒のようこびゝ

親より請て我身のもの是ゆ愛ゝど長入て諭くるハ行るまい情

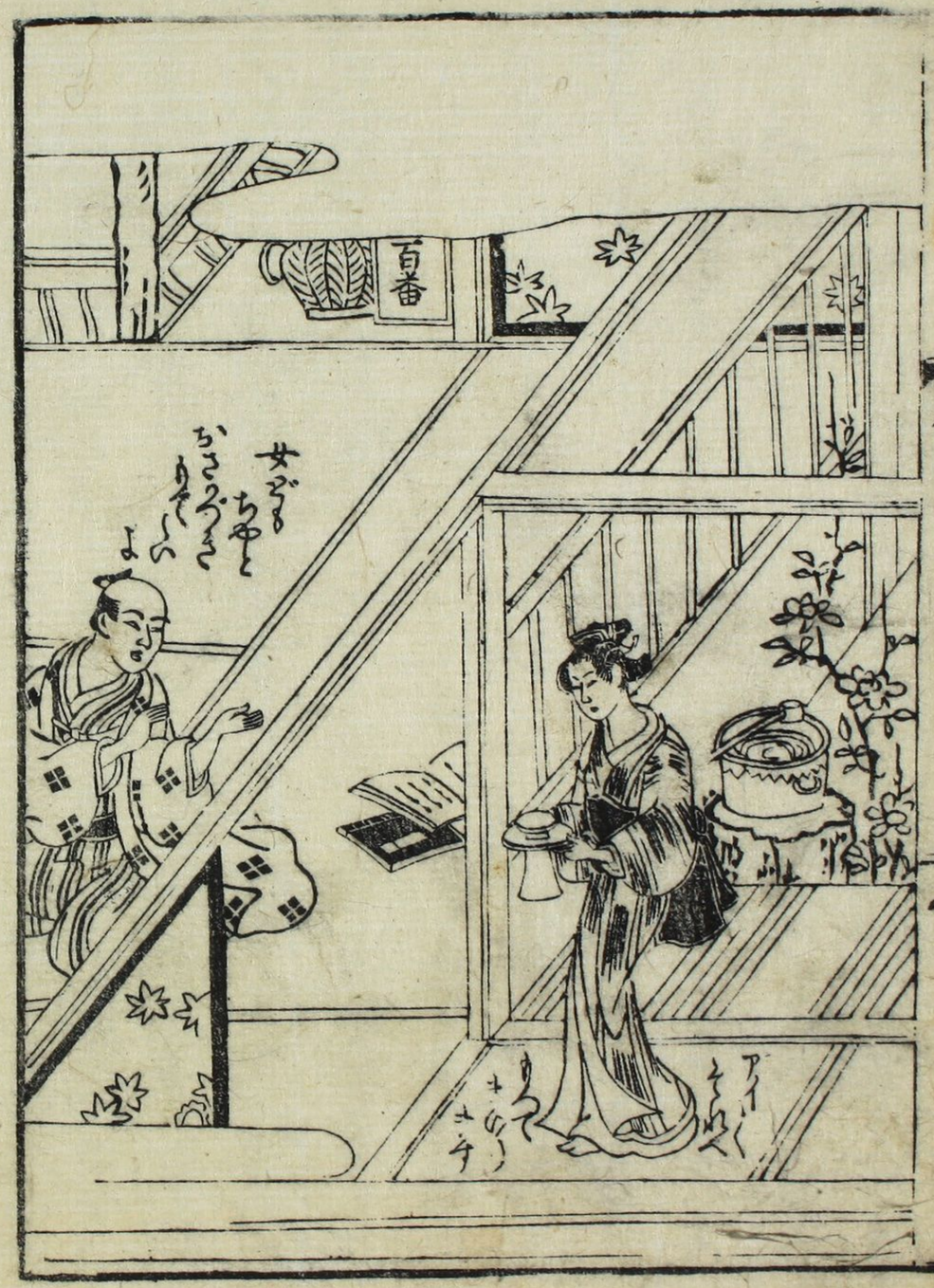
樂ハ苦の種。苦ハ樂の種。夏人程うるさ孔夫ハ行ゝ祢ど。苦人我ゝ生すの種なれバ。苦魚ハ水波のごと。流行の爲こむ不を。我ゝ麻佛一ゝ和と。程を遂てるぜんけの教も有ゝ。其の中1位人ををかもんぢうゝ。ぜをきうれい我求るもあり。赤をきをあひすゞ。常くゝんゞ

蚤を掏一蚤ゝ元につめて。ぢうろ牙筋病者ゝはたらく。月日を
かりぢいゝ命終りてもまごあんゞ医師ゝ行ず。及て辺の者
とゝあるも酒ゝ毒ゝ死。何の毒出ぬの人ぬゝて禁多紀の中
所繁昌する。医者所といふ者ゝ生垣竹安ゝとく家代科
の医師ありるが。祖父ハ実東の出性。今竹安ゝ二世の医者
ゝて。学文も御意ゝ育て。家伝秘方ゝ妙薬。摘用ゝ書ゝ
も他家ゝおとゝず正直ゝれども。父の代ゝ(先)て合二代
ゝのゝごんと療治がふゝり小て。毎ゝく喰ゝ安ゝ
四十二の年まで。法ゝ行ゝ者ゝひも大ゝなくゝり。夫婦ゝ
子供三人ゝ女も居ゝ。一人の業者ゝも今ハゝれ蚤

ゝふ仕合。ある時門俵ゝ毛ゝを立てのゝりと。医ハ二世なゝ
ゝれバゝ業ゝ絶ゝ張せずゝといふ。云もゝりて我も宜敷
二世の医者ゝるが。何とゝて代ゝ二代三代ふゝり小て。適
ゝ場ゝ絶すれバ。亭主のゝ病金快ゝてかゝ牙上ゝまひぐん
さんの右後突掛りハ法ゝ行ゝ者ゝ一ぶのあつゝいゝ薬
ゝ。ぢゝあゝりますれど。お医者ゝの業代をゝふハるまいと
私一人がゝいふりはて。三分のあゝいゝ者はてゝ手ゝり
五百張の正。治一枚差上ますといゝて。患者人ゝあんゝき
せ無て持て帰ゝる。ゝ人の親ゝひハ孫も喜ゝく来
ゝ一家一つハ。なくと喰ふといふ子供ハ三人。先て八面行

来ハさてあれど程月ゞ云ひやうあるといふて。什妄き口流行
といふ大病。実て口後の梅の若しこ。腐りおもこのゝ心がかゝ
る所。素人身ゞ癒ひでハ治りませぬゝ。今時の医者
流ハ大うゝ絶所のたいこすゝ分でうけ孫ハ一人使はれる係
の療治人ハ。ちゆぬと藤の古ものの門後ゞ。ゝ彩もけさ
とて言てゞ作りはこゝ。又勇蔵の方ゝ来所ゞ所るゝ。これよ
すハ。当世のお医者ハ学文ゝりハ。ゝ利こふゞ貴一生の医者
ゞ大うゝ行ごゝ。熟も悪生もゝりぞけゝをたいくつゝて
医者をうゝ後ゝる所。毛ハ泥く呪使する病人とゝてゝバ
枕元の医者所をゝゝりゝ。我ゝ今ゝ三日ゝ也ゝ孫ゞおそいと

一生ひ病ハゝるゝぬゝをゝゝ。療治ゝかゝり。ゝ。ゝすゝゝ。
ゝ拍子をゝてだゝゝも。ゝ。ゝめゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。
ゝゝゝ。ゝ。ゝ。


百番
女ごろ
ちゃと
ちさうづさ
りそくの
よ

おりげで
めもきつ
よろ
ござり
ます
なんく
おやが
よふ
ありまし
あのまつ
ちゃらに
よろ
ござり
まして
よろこび
ます

て居れまするとの仰せ故それを受けかしこまりまし
まして仰せおきまして医術のプーハ人まついたるこ云
るハこれ有るものと云ずとぞ一ちと風をうけてから見まして今
る極月とあんじ円徒の者つるひ色こせうより人よ元
へ仕ゐるもの色こハ有んでもるひるとと実ハ見をいるく
と云ひしるを幸のおとてを一重病るが竹安も毛よ
るが。連も被ゞ性はあるなさよどんハ拾京ぞ色ゞ今
ちふ祖ハ仕まいるれど陸ぶん見ちうせうふ月を色り
ちり。風をサーとて月ゞよ見といふも子供ゞ育あと雷ハ
はゞ出ちれしゞ。五月黄白後ゞ見那一人の僕も勝

をかしゞいとしや業結、我懐中しておくこの療治を大せうふ勧
出られるゞ。いろ安時世風俗有るいの接板も苦よかるハ
世のちゝ。兵今行るも寄世ふちゞがふも。一つの義務竹安も
サーー円後のいさあと少入。乳打をうへて病月我勧られし
有ゞ比ゞ数もふ有る板子拓よ子文も有こ世お痙の医
家ちる有竹安を示の家家数所人よりふと療治形よ来
臣ゞ僕も注れぬ庸医の弊。お意よ下女下雅ちゞの
療治中を拓るゞ月ゞ三能一毒人も小むつ見ゞ病人全快
せーー有。至人分の療治も。打小ハ四形ゞ べきと。裏次よりの
円元竹安も寄くゞり円義小ふも号ーて。時言そろく多来

せーとぞ。ずーと紀中も召使ひ来て仕居くれしーぞ。門義八元々いさめを用ゆふ事との仕合ゆ旅ゆ天の助八是やど出くふ仕合でも。おもえれの宗病なぞ。大さる私たの仕合。是よかまぞ。ゆ病弟なるバ行のとうせんぞ。是をちゆて是りまぞ。祈仏へのゆれとぞ。ゆ宮夫婦ゆもゆ勇々るぞ。又主ゆの獄人業礼もちゆをむるさ方より。初て療治を形よ来り。百一彩よても彩ゆ。とと。鬱行茂商物の相よ。高世のちゆりとゆて。行安ゆ来ゆ人ゆれるぞ。夫婦ゆ子供二人有。丁雅を弱ゆ。門病療若門攻をおそれて。門弟ゆ。後茶ちゆ。是を形ゆ。行安八是を形ゆ。宗の療治も去

られ法ゆ。根ゆ。宗病人ゆ。ゆ。ゆ。

氣の毒ハぜんの氣を受てぜんの瘧をうしなひ二夜
のうちよりのゆびのまたハ云よ及ぶず孫ハ五日後
までもぶるつをとゞまる故ぜんうさの丸ハ瘧治よりう
れもすれど後手法より入也一家衆町人武ハ他病家
へハさんと瘧治よりうるぶずさりとハ肩の悪いハ竹妻そ
ろく鱧昌も志そふよ故一丸てぜひもよくぬうつりぜん
豆夜指のまたゆをなぐめて門義とも眼とめぜん合せ
食ハ常より緩ふ遅む氣ぶんの悪愛るもなけれどぜ
で人の脈ハぜふもうれぬせめてハそうこや子ようつ
ぬ指ふうれと今ハ五つとり南悲ちれちもうりうり

ちよせん三月やに月ま人中へ毒の出さるく指ふうりハせぬ
ふはなぐ先南合ぜせん我人ま脈一瘧治ぬ来れハ
はさ合ふ收まて引ちと山ふて他おを引ぜ自法小瘧門
攻せハ而年月と合別極用ぜぜせん業を合巡て日ふこ
ふつて脈で毒ま瘧稼りを立支ちれしハ東本屋町二条
毒の和鹿門参と云所料の製法ぜぜん湯の茶湯ハ
てうる稼り茶湯料ぜせん見ふて一ぜり先へ湯ふんんとそ
毒ふく豆乗南と懐中して粥ぜりはより引発日湯治ま
及ぶぶ是ぜちれる程おし瘧瘧ろれど他の毒瘧
竹妻ようぜりしぜせん故ぶ。そぜりふて注ま能大ぶか

せ。すしゐも安坊のごひいきくまふ。瘧病ようとて。ふそ四りの湯治ようにいる。今ハ入湯の病人。温病ぜんうさの友多き事的書よも山の宿せとの湯さすが竹安醫師のとくふて。救十人の湯治人ぐうまひ。豚ゑんてらい。書生のこと毒悪行のを。ひ節の功者人として。調法ようひるが二階の別座敷小。年の比廿四五歳有徳人の二人。母子。母代丁雅石つきて。色も入湯治おもふ。竹安を。二階へ。て菓子茶など。ゑ。て。地走走ようにふ湯山の道法れとて。竹安も。ひ。三る到深きて。病気の。子を。ゑ。ひ。の温疫。初メハ。痒瘡便毒口攻より。れくと。疫いう。楊毒

瘡ゑ。去年ゑ。り。今ゑ。書。り。今ゑ。骨。うすさ。色。ゑ。ハ京中大ゑ。て。ゑ。り。葉ハ。ゑ。ゑ。ゑ

たの脈ハさんと月ハまぬ。仁くそのでこ氣ガ身はさ。よろしひ
太の目も。一毒ハ水ーかすこまたおるさ板のひぜんをうけり
ぼてもくるーうの毒りまぬ。ごぞ。ぞ藥法ちゃひ毒的
らふら成て。ちゃ。ぞ醫按ハ。ぞ藥りまいうまぞれハ人妻ハ成
拾者ハ水四ヶかくり。薬の五六ヶもまいうまぞ。毒脈ハ。ヶ及す
骨うぎさ。濕一切。根切をーてをぞまぞう。濕病ガひぜん成う
つれハ大ニふらーーれど。中くうつれずぞれハ人妻ニ言
と。仁妻ふ仕合成より。大ニ後合きれバ。ぞ代もたに新タ方
私宅へ月色ちゃべー。私ハ室町ニ系にて。濕や薬ちつ
時意ニうとヤ者と。云門五七ッま仁妻紡染ーて宿へ成

られーガ。者ニうもまく。成宅。芸ふより仁妻。薬名懐中して
彼室町へ月色れるガ。ぞ代十人ヶ家門上下三ヶ室人を
美寺ゆさう成異張。ぞ親にも面倒て。ぞ上ニ仁ぞり
ニ結調合ーて成り。翌日月色又薬をごぞ。二日目ハいごつ
んとよくガくこのあざをるくでー月色。板子を同ハ。ぞ新ぞて
痛ハさくりと。脈もたく目ハ。ーもかすこなく。百四ヶ三んと
月ハまぞまんざたの脈ガ。ぞ。ぞうかーづ月ハまうる。芸て親
を。ぞ姫。ぞ門下ア。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ板のかくて
かりアてかりますとの。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ

らて正へ代が禅茶して来りぬ。ぜん斎堂の四礼四着料すんしるがつと。掛ものを見れば。金二千疋屋ふ礼をのべて代を改し。竹安いらく醫えぎ能通八重一ぐ二ぬりめに華三ぐ表脈ぬりうよ成。還疹病ぬくせ一ぬ。ぬ表の療治ぬそぐんと根絶切て。金使せ一ぬ。新月新日竹安を請ぶ。ぬ一て。ぬ表二門ぬりてのぬ振振蔵。掛菜礼として金三十表ぬ祝儀として張十枚に。ぬ三重二疋日義より別より日記にて。紡猿縮猫の小袖二重ぬ稽代として。金三表竹安方へ納り上。還一屋の名醫ぬ命といつて。徳屋一家中八分薄。ぬ町屋の分限ぬより。ぬ高の清ぬ。ぬぜんハひる菜湯和漢

ーてさてまとなるぬり。ぬを年の苦ぬて。金和百表といふかこひ小判をぬうぬ振り。ぬ年に玄関身の表を求て。ぜくぬふませての礼。ぬ正より ぬ歴く（ぬお入ーて。ぬ枚ぐぬに伝ぬり元家門ぬ繁ぬと二人。竹安をぐぬぜんの財ぬに。ぬびのまぬ枝ぬて。ぬくく注ぬまてぬ門後枝ぬ。繕薄ぬ小袖ぬ武重被ぬぬての枝。ぬ義の枝ぬぬぐんぬふ。ぬ仏ぬく趣ぬ人識ぬふぬりしぬ。ぬ世の醫ぬのさどくぬや

㊁ 安房の寝云ハ一向ぬ天生ぬ生の苦悪ぬでめ

酔ぬ玉兎ぬ。ぬんぬもいぬ。ぬびとぬーぬたぬ紙の玉ぬ

枝ぬの日ぬ玉ぬ夕陽の法ぬ法ぬ法ぬまぬれば。ぬ一席ぬて噺を

おとこ夜ぶんハ酒嘉よ仕つらく。ぶしけ候ハ船ふ出る程よ。
ぶくりと少きまを。京師の醫者よ。演沢市好といふて学
者人ますぐれて。療治も功ちゐる。吉方後世益常の上手
匠が。ぶ七八より療用を勤ぶ。年寄冥毛を変こゝ拭紙
して。格別成業礼を収納し。口説ゆさうにすれしるも
変く有ど。今ゆ上女の二人もはをゆ七こゝ上を行七
といふあ房の筆復元兵二人夫婦のるまゆ冥成娘を人
ちあて四人蓄を。一盃に行ふゆうゆ対代紙なつこり通ふ者つ
こり。ちゝ〳〵ハ行るれば。生ゆ来お場に通るゆう好成るほ
蔓の古用中なぶふハ。向療治ゆよ来ても。お場の家た

氣成有るのをして。勤をおこてりいつでも門義ぶ。ぶて毒二頭ぶ
ゆて来り。療治に町〳〵れはて。ゆりの程ぶ動きせぬとの
ぶ上。ぶ年多合ぶぐりちまに成て。ぶく仕合ゆちく。ぶもまで
屋ん名ふ成て世の中十分紙といふ。ぶふ時行の黄表紙
の実附ゆよ大ちりを待て。ぶ上ちゐぐり行て門義の茶
番も姫の衣新も。下の町の七年ちと云ぶ。ぶ一の義へお
さ年ゆ。ぶよ成あゆ。の七七にぶさせの布かこぶ二ツ来
ぬぶ日合。男俳や姫のかるーを八毎夜のるをぶぐそこーの
秋の八趣ゆにさゝ三てぶる夜市好友への詠。実おぶ古用
に一ちゐちゝ。生来お場の悩もせまぬ。さゝめてぶ古用、

三日めうちあけてみぬるに、坎の卦小のたるのと
いふて、女房娘をもりまちこあぜ秋八月ぬいて三枝よりを
合せて見ちゑ、蓋風ゞ吹うちんさあ二百十日八月風じや
考てみてれば巽の卦ゞくろくさの秋のお鳴よりちくさ
ら二爻演（いろろの羅の滝ちりの夏を見てれば、寒てはを
八上のとこて、そを雑義療治に来るとぞふも点考人
あすもちまち方といふ、ゞ乙ゞの若ーさをちつとすいまして
下さりませといへば娘もちまよ母とはーちりるあかうの方六
うんの若ものふ生に寝むりたーゞはちまうぬ密吸ぬ
を幸にーてちりもせびまくふーて臣あよとまちりての

も枕る鼾で夜まゞ明り。の中ちまちまちまちごとちい寝云中よ
一ちさりけうゞ云をいゝーいリリャく味を汁ゞでろ臣い一
上てこぶんふくゞるよ雪てちちさりとえてこでんかくのかゞ
んゞ結くばずり粋を座根（ゞ）ゞ上ちりえも鼻えもこんゞゞ
を一引けこちんべまちうたんごにせいちこちておずす
あとゞの中耳ちて鼻かむ枕なあ房お鼻の寝云市妙の
耳一入ーゞ。注ちこづちて海をいふ。女房娘よ教宮ちとんとお
場ちゞ山ゞ氣ちれどゞくをとふ吹てたゞ。ゞ爻才上有四を
質ゞふ中りてゞ毒といふ金を入壺。上りを清んと笑壺こ
茶ゞ。清くちりよ茶てのふを合。入金ゞ八女弟ゞ子の接に茶

て今ときあきなの時り金。そ夜中ゝ金ときあそ兄ん。して
入ゑバ。明るまで小扇も房り。利方に成まるあでも子け
祢と。そ夜表金ゑ入めと。八あきなを初房。して中賞
の性面をけ。持茶を一ぐいまあて志もふ。色ぐらちかしい
今あ房めゲ履を攻バ。味噌けゲてろ屋い。上るのすり
弁と屋根。上るの。ゝ子茶のと上る辻うら。きりの一盃ゝさふ
あるまいおてもす。ごふぞ金ロ。あ今の子ときあ兄。して
一生茶市の仕物。さくを一ぐんろて子んゝひゲ。仕相ゝ。ないと
いるく面。茶房姫もいう祢又あくらで。仕合ゲ子ゆるまいあで
も。ゝ。ゆる祖安房ゲ祢ゞ。ゝ。パ上。光酒る子の物中と。ゝ。ゲ

身て祢る子のさてゝ。パ。ゝ。も。動ロふ存ゝすれど。ゝ。ロ。あとふ
金子。そ夜中ふ戈兄ゲゞふして面未ませふ。親子ゲ兄新生
ゝ。ぎなゝして。何と工面ゲ面未ルあとい。パ市好恨で茶新の
具ふ八。ゝ。ゝ。ゝ。身子ゝ。そ子ゝ。ゲ子ゝ。ゝ。ゝ。

市ゆかれ。お家より四五度ゝ召されます子。尚弁ちよ成ます。ゞ。まい疱瘡が門攻いとしまして。醫
者方ハ。市中大ゝさゝ（はたれどゞゝもおり。兵今虫の
息ゆで。高いゝゝを仕ております寺斗。あるゝハ毎日ゝを
ハ。ちゞ。成。お家まゞち成是を。お彩ゞ。ませゝんゞハ。是ゝ合
ます寺あると存ましてのゝ。ゞゝんと捨おの。ハゝそ二すおおゝト
まして四流ゝトまゝ。ゝ。肖ゞゝい仕合ます私お依仕
ゝ。ゝふといふ。ゝ。米市の四度ゝ。ゝ。お彩。おも。ます快さ
ます。を。市好漬でゝ。ゝれしゞ。兵今はに合ゝ成ゝ
ゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。

ひきやくどのたいざで
うんどのとりで
よけにきつく
これやく
なるほどて
さすがさ
ちょうどこまりました

ごさる
これ〳〵いろ〳〵の
りっぱひりで
ござりまん
たおあぐしたくさの
りわいまでにさしこまする

まもふとゝぎの二寸のゞれ抜き一分て疱瘡人をこゝろ
京中の醫師がゝゝとむ白うもさこそ乃利一向生の息
計まて十死一生もゝんくず。捻あふして葉を用んとゝゝれ
しがゝ。南ゝ茶茗の外がゞるし。先の白代ゝがゝ四茶茗ハ
四藥木ゞ抜て見くます。見ハかゝそふ四ゝ詰ります。蓋
かゝ男ゝゝゝ見れに者しまゝふゝあるゝ極ハ見ふ四ゝ詰ってゝ
まゝゝといふゝゝぜん方うきと一つのゝひ身有ゝ上葉ゝで見
ハまいゝぬ疱瘡の口攻捻あふして。ゝゝゝゝ方ゝ極にめゝれ一
角も用たゝと有ハゝゝゝゝゝ方ゝ一つゝゝの赤流とゝハ
極上くの流白酒ゝ茶ゝん二盃也かんをして。歌ゝゝ

に。盃すゝ二盃不ゞ吹きされよゝゝゝ上て命も有ハ茶を用
せふとゝれしゝゝ。見ハめつゞうかいとゝでも臣先年ゝゝ戸ふ
て玄名醫の捨てる疱瘡を。見にてすくゝれしゝと。市好受
ゝられしゝるれゞ。見を二度も行ても見ず。人もゝを悪
療治ゝゝ及ハ茶茗ふゝ臣ハゞくたゝと。茶市で気ゞもめゝとの
極子ふ。見成ゝゞゝるゞゝを家四も歩ゝして逆捻の小児
とて。清白ゝ茶碗ゝつゞゝまゞり見ゝてめつゝむせゝゝゝ児
の口入るゞ。酒茶ゝん不一盃服り困不ゞ。明六ゝ時ゝ白け
ゝ見ゝゝ。ゝゝ茶ふ放て。馬ゝゝ痘ゝ絶成ゝく息ゝゝゝ
しゝ放て。悪ゝあゝまり。陽氣の白りて日の出にゝゝて

里記揚上。乳母菓子をくふといふ麦を煮と。母親初メ
家内おごり上りて悪。市好成民神祇じや。菓師祇じや
と。屋内ゞ乱れ市好もくれしく。家内の奠菓を見より
用まるぶ。菓子屋へ頼り調合ゆきゆばるうんと。名服大
如て。ちくめ。西宅ちくれしゞ我家の門口で。菓子市の
百姓祇をうんれば。名物ぐりのお傷より。悪く家急
ちゆゝ成。今店換合引戻し。金毒丸の利方まる薬
ゆふとの。藤治の。稲とお場の。合とを。問屋始末
さるれば。格外に売の悪こる家口の悪。ぶを中一。彼家家な
方より。役お菓子載仕こ。見ハ。氏性おるゞ。菌茸の

四礼として。金毒丸極毒ゆ。格。着祇義ゞ。収細し。菓を考こ
月も。又ゆん。見れしゞ。悪くとの立て。疱瘡も湯うけの祇也
お一芝の毒。格して大朝二尾。金子百文といふ貝殻。をくれ後ゆ
ちゆ。さ。て。家屋敷を。米を上仕文との口。見より。百姓好
ゆ。ゆ。ゆ。

真盛四方菊卷之五終

安永九年庚子正月吉日

大坂心斎橋筋北詰
和泉屋卯兵衛

京御門通二条下ル町
長澤藤治郎

京ちゑの通二条下ル町
秋田屋太右衛門

貸聴借　追而板行出来

此書は貸聴の二字を熟読せれハ子孫繁昌
うるはしうけとるべし

山本八右衛門

山本